

あとがきにかえて



私は、ささやかな提案ですが、やはり、幼児期における教育は、正しい言葉（語句と文章）づかいにつながる遊びこそ、一番大切な『毎日の子どものしつけ』と考えます。

例えば、遊びの中で、自由に踊ったり、自由に唄ったりしても、正しい言葉（語句と文章）づかいにつながらない遊びでは、『毎日の子どものしつけ』とは言えないと思います。お絵かきをさせても、スイミングに行かせても、ピアノを弾かせても、運動遊びをさせても、絵本を読んであげても、テレビを見せても、などなど…、どんな遊びも、正しい言葉（語句と文章）づかいにつながらない遊びは、大げさに聞こえるかもしれませんが…、幼児期における教育とは言えないのではないかと…、とさえ考えます。



私は、戦争のさ中、茨城県の小さな村（行方郡潮来町・大生原延方地区）で生まれたのですが、そこで過ごした幼少の日々の実際の体験（100%ではありませんが）を、【季節の言葉 12 か月】や【パピーちゃん絵本 12 巻】、【パピーちゃんビデオ 12 番組・全 6 巻】、【こどものうた 12 か月】、【わらべうた 12 か月】、その他を、非才ながらも学習誌や保育誌、各種メディアに発表させていただきました。いわば、本書の教材【季節の言葉 12 か月】は、『三つ児の魂・百までも』の諺の『三つ児の魂』の一人歩きです…が…。

作品を発表できたことは、ひとえに、私の父や母、そして、ふるさとの人々からの恵みでもあります。それ以上に、現在の幼児が作品を楽しむことで、母語（母国語）の美しさを心にやさしく残し、日本人として生きる喜びや、祖国への愛を、「いいなあー」と感じ、その恵みのおとずれを享受してくれるにちがいないと願って作品づくりをしてきました。もちろん、心から大好きな出版社や TV 局のプロデューサーやキャスト&スタッフに恵まれたこともあります。

作品のテーマは、『日本民族の幼な心の響き』としました。それは、『毎日の子どものしつけ』の中で、幼児が大きく成長し、そして、子どもによる子どものための子ども集団が自然に生まれ、その『美しい母語』を、子ども集団の“よりどころ”として、子ども自身みんなが、結果として共通に意識するようになり、そのことが、現代の子どもの病む状況をも、大きく解決していくと考えたからです。



たいそう、迂遠（うえん）な言い方ではありましたが、現代の子どもの今日・明日を元

気で明るいものにするためには、私たちが、今すぐにでもできる『美しい母語』への回帰以外にないと、私は、未熟さもかえりみず、発表したのです。



ところで、私は、おじいちゃんになってしまいました。よく、『おばあちゃんの知恵袋』というお話を聞きます。ということは、ここでは、『おじいちゃんの知恵袋』になるのでしょうか。

あとがきを書くにあたって、私としては、ちょっと背伸びをして、書いてしまいました。いつもとは違うので、ちょっぴり恥ずかしくも感じるのですが、実は、このささやかな【季節の言葉 12 か月】を編纂させていただくのも、ひとえに、『毎日の子どものしつけ』の中で、かけがえのない母語を大切に身につけることこそ、幼児期における教育という提案であって、決してそのほかの願いによるものではないのです。



私は、ずっと前から、学生の笑顔と笑い声と共に学んで、在学生や卒業生と一緒に楽しく読める『幼児のしつけ』の実技・教育書、特に『言葉の教育』を書いてみたいと思っていました。それが、永年にわたって日本の教育に光をあて続け、私自身が「いいナァー」と感じる東京家政学院大学の学生と共に、今日この日に制作できたことを、この上なく、心からうれしく感じます。

【子育て保育～季節の言葉 12 か月～】のえにし〈縁〉が、少しでも大きくなることを祈りながら…。 ありがとうございます。



2009年3月、ちいさな春が、そこここに見える時に。

五十野 惇